2017 年度プロジェクト活動報告：根尾コ・クリエイション

■プロジェクト代表：金山智子
分担者：小林孝浩、吉田茂樹、James Gibson
履修生：工藤恵美、野呂祐人

■研究概要

本プロジェクトは岐阜県本巣市の根尾地区（旧根尾村）において、何百年にも築かれてきた生活文化を、新しい技術や視点、価値観をもって捉え直し、これからの持続可能な地域社会やオルタナティブなシステムを考えていくことを目的として、2015 年より始められた。プロジェクト３年目となる本年は、これまでの活動拠点（ねおこ座）に加え、ねおこ座の対岸の小さな空き家をリノベーションして、新たな拠点づくりを行った。これは、地域の記録や記憶を表現する空間そして活動をコミュニティに埋め込んでいく場づくりという目的で作った。

今年度は、集落に加え、伝統的な祭りや調理現場などでもフィールドワークを行った。限界集落化に伴い急速に風化されていく根尾集落のユニークな文化を新しい表現としていくことは一つの課題であったが、その一環として新しい拠点（ジャッキーハウス）をフィールドワークでみつけたモノ・ヒト・コトを新しい表現として発表していく場として活用している。活動を通して経験したコトを小さな物語として表現した害獣戯画（アニメーション）はその一つで、これを空き家の中に実装させるシステム開発も行った。岐阜県技術センターや（株）ミノブループとの連携により、新しい電導印刷技術を美濃和紙に印刷し、それをトリガーとして障子に映像が投影されるシステムである。また、美濃手漉き和紙にレーザーカッターで製作した型を用い、落水で模様をつけた和紙の製作にも挑戦した。古いものと新しい技術を組み合わせることで実現したユニークな表現は、メディアでも注目された（NHK、ソトコト３月号、事業構想）。

また、ドローンによる限界集落の空撮を行い、古いちゃぶ台の中に映像を実装させた。これにより、限界集落の廃屋に埋もれていた丸いちゃぶ台が、会話を生みだす場へと変えることの可能性を示した。

根尾の廃屋からレスキューした古い木材や家具などを表現として使用したことを契機に、同様の活動を地域ビジネスとして展開している長野県諏訪市のリビルディングセンターとマスヤ（ゲストハウス）で現地視察を行った。視察は、根尾の大工さんも同行し、根尾の古材や廃材などを地域に生かしていくデザインを、翌年度の課題として地域の人たちと検討していく。

■主な活動内容

◆フィールドワーク（８月～翌１月：越波、黒津、大河原、樽見）

◆畑作作業（４月～翌１月：植付け、収穫、種の採取）

◆イベントや視察（翌１月：新しい拠点オープンイベントとワークショップ、３月リビルディングセンター視察）

◆成果発表（９月～翌２月：NHK、ソトコト、事業構想、IAMAS2018）

テクノロジーがつなぐ、地域の未来。

域の未来に夢を抱ける取り組みを進めていきたいと考えています」

研究テーマを、地域に「実装」する試み。

IAMASの在学生は、現在42名。それぞれ異なるバックグラウンドを

る。当然、研究テーマも、得意領域も十人十色だ。

IAMASの金山智子教授は、「そうしたアートやテクノロジーの力を、

地域コミュニティに実装して、『こんなこともできるかもしれない』と体験してもらうことに長年取り組んできました」と語る。ただし、ハイテクで地域課題を解決するといった文脈とは少し異なり、金山教授が目指すのは「可能性志向型」なのだそうだ。「これはアセット・ベースド・コミュニティ・デベロップメントという考えなのですが、地域にあるすべてを『資産』と考えて、そこから新しい何かを生み出して未来につなげていくわけです」。

そんな金山教授が注力しているプ

地区が直面している害獣問題を、最新技術でアニメーションにした「根尾害獣戯画」。障子に描かれた畑のイラストにタッチすると、シカやサルなどが現れる。

こちらは金山教授が長年取り組む「樽見鉄道クラブトレイン」の様子。ローカル鉄道がクラブに大変身する。

県立の大学院大学で、新しい価値を生み出す。クリエイティブクラスと行政の、究極のコラボです。

Future of Gifu Technology & Art

地域×Tech.